

岩手大学工学部
岩手大学工学部
岩手大学工学部

正会員 安藤 昭
学生員 駒井 博
学員 田母神 宗幸

1. まえがき

文化景観はそれぞれの時代の生活様式と密接な関連をもっている。城郭景観が出現したのは日本の歴史上最も治安の不充分な室町時代に続く桃山時代である。桃山時代は各地に勃興した武將間に新しい秩序が生み出されつつある時代であった。このような時代には自国の防衛と治安とに全生命がそそがれるものである。すぐれた防衛のためには鋭敏な空間知覚が必須の条件である。そしてこのような条件のもとでは天下泰平の時代と異なり国定、安定的な空間の思考はゆるされない。ここに飛鳥、白鳳、天平、平安、鎌倉時代の文化景観とは性格の異なるダイナミックで変化に富んだ景観が出現することとなる。このことがダイナミックで変化に富んだ城郭景観に関して非対称的な構造物であるとか、画一的な計画を極度に避けているとか、個性的であるとか、日本的な特色をもつ構造物であるとか言わしめているものである。ところで、我が国の文化景観のうちでもこのように特異な存在である城郭景観について分析を試み統一的に評価し、そのあり方について都市計画的に論じ、研究は今までにみられない。本研究はこれまでの一連の城郭の視覚構造に関する基礎的研究の成果にもとづいて城郭景観の分析を行ないそのあり方について考察したものである。

2. 城郭の景観分析

景観モデルの分析結果より得られた天守閣の外部空間の諸要素の位置に関するスライドをPhoto 2～Photo 16に示す。この結果と城郭景観に関する2,3の文献資料にもとづいて城郭景観の分析を行った。

(1). 平城の景観分析

本項の目的は視覚構造について得た上述の分析結果にもとづき、それを幾何学的に適用し、その結果と実際の空間とを比較研究することである。我が国に現存する平城は松本城をはじめとして名古屋、大坂、広島城など21城にあよぶ。ここでは平城の分析例として松本城址を取り上げる。

平城、平山城、山城の比較から知られるように一般に平城は郭内の面積が大きいのがひとつの特徴である。よって天守閣の外部空間、いわゆる城郭の至近景観にすぐれたものが多い。あるいは逆の表現をすれば問題のあるものが多いのである。ゆえに、



Photo-2



Photo-3



Photo-4



Photo-5

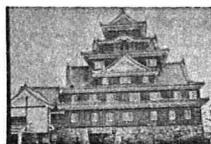


Photo-6

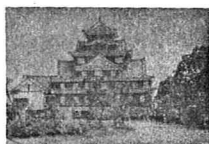


Photo-7



Photo-8



Photo-9

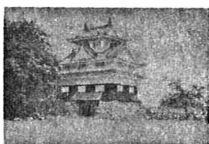


Photo-10

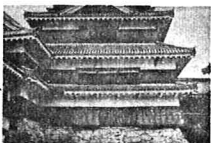


Photo-11



Photo-12



Photo-13



Photo-14



Photo-15



Photo-16

平城の場合は特にこの至近景に着目し分析を進めなければならぬ。このような観点から松本城を分析するとFig 1のようになる。ここに示された円は小さい方から $D/H = 1 + \alpha/2$, $2 + \alpha/2$, $3 + \alpha/2$ に相当するものであり(α は天守閣の平均幅員)図に示されるように池に沿った遊歩道は $D/H = 2 + \alpha/2$ となっており、天守閣が最も一体的に見える位置(Photo 16)に相当している。公園内の主な建物である公園事務所、裁判所、日本民俗資料館は $D/H = 3 + \alpha/2$ の外側になっており景観上問題はなく、天守閣の細部($D/H < 1 + \alpha/2$)を見るためには黒門から本丸広場へ入らなければならないかえってその神秘さを誘っている。また天守を中心とする公園の規模は保たれている。更に濠の大きさが天守閣の高さの2倍もありしかも天守台が直接水面に接しているものはわが国では他に例がなく湖上の天守が望まれることも当城郭の特色となっている。以上のように視覚構造と敷地計画のバランスがきわめて良く取れていることと比較的簡素な建造物であるにもかかわらず当城郭の名を知らしめている原因と思われる。同様の視観から甲府城址や小倉城址の景観を分析すると城址に対する種々の建造物の配置計画の欠陥が指摘される。

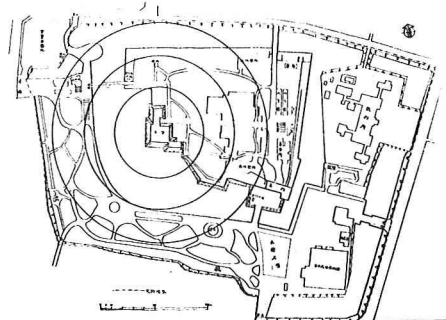


Fig 1 Landscape analysis (Matumoto)

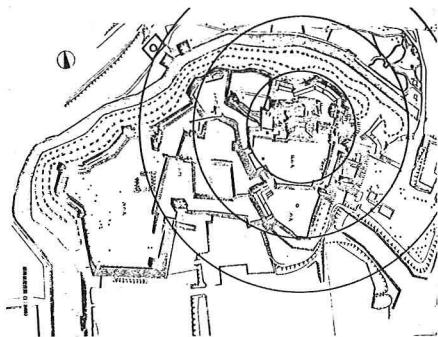


Fig 2 Landscape analysis (Himeji)

(2). 平山城の景観分析.

平城, 平山城, 山城のうち最も多いものは平山城である。ここでは平山城のうちでも最も景観的に評価されている姫路城城址を取り上げ分析をした。Fig 2に示された円は松本城の場合と同じく $D/H = 1 + \alpha/2$, $2 + \alpha/2$, $3 + \alpha/2$ に相当するものである(以後 $\alpha/2$ は省略する)。一般に平山城の景観は都市景観としてすぐれていることとその特徴である。特に姫路城の場合はFig 2に示されるように備前丸(本丸)を $D/H < 1$ と狭くし、さらに天守台の石垣を極めて高くして、しかも備前丸には塀をつけず、天守閣の石垣と備前丸の石垣が郭外から見た場合にOver constructし、いっそう天守の高さが強調されるように設計されている(Photo 2)ことなどが指摘されるので都市景観として見ることにウエイトがおかれていることは明らかである。この丸から西の丸、西の丸から郭外へと視界が相対的に低くなるにつれて、このOver constructionの効果がいっそう発揮されるのである。しかしこの場合のように本丸を $D/H < 1$ にすると天守の外部空間すなわち至近景としての効果は半減する。松山、和歌山、高松、彦根城址においても姫路城と同様至近景として見るべきものはない。さらに平山城の見られ頻度に関する研究結果とあわせて考察すると平山城の景観的性質は都市造形的に把握すべきなのである。最後に山城の景観分析と、城郭景観のあり方については講演時報告する。



Photo-17



Photo-18

参考文献. 1). 安藤, 駒井, 田母神: 天守閣の外部空間の分析について, 本講演概要集.

2). 安藤: 城郭の環境設計に関する研究, 岩手大学工学部研究報告第28巻.